

発行:日本写真芸術学会会報編集委員会

## The Japan Society for Arts and History of Photography.

### 1. 会長挨拶

猛暑や停滞した台風など異常気象ともいえる気候の夏が過ぎました。会員の皆様にはお変わりなくお過ごしのことと拝察いたします。

この度、4月23日に行われました令和6年度第1回理事会での互選に基づき、6月の第33回通常総会（議案送付による文書総会）でご承認を頂き、会長の任を拝命致しました。4期目となりますが、さらなる重責を感ずるとともに、ここに一文を記させていただきます。

振り返ってみますと、1期目の2年間は通常に学会活動ができました。しかし2期目が始まる2020年から新型コロナウイルス感染症の流行が始まり、学会としては活動が大変苦しい時期に入ってしまった。その年の総会は文書の配布、研究発表会は要旨集の配布のみとなったわけです。2021年は学会創立30周年という年にも関わらず、研究発表会は初めてオンラインで開催したものの、学会誌の記念号を発刊したほか目立った行事を行うことができませんでした。

そして3期目となる2022年度からは事務局の外部委託という本学会としては初めての試みを開始致しました。これは近年、学会員の減少が続く、それに伴って財政の状況もかなり厳しいものになってきたこと。毎年事務局として高額の人件費を支出することが困難になってきたということがその主たる理由です。これまでにない試みを開始して2年が過ぎました。今後の有意義な学会活動の継続には不可欠な取り組みであったと考えております。しかしながら、事務局業務の効率化と迅速な会員向け各種対応という目標は必ずしも達成できておらず、この4期目において次に引き継げるよう体制を整えることを仰せつかったものと認識しております。副会長は継続して吉田成理事、西垣仁美理事、上田耕一郎理事にお願いしました。

また昨年も記しましたが、理事会が活発に活動することが会の活性化に必須のことであると考え、これまでの総務（庶務）、財務の担当や編集委員会に加え、新たに事業（企画）、広報、会勢拡大などの委員会を設定し、理事会メンバーがいずれかの委員会で活動する方向で運営を進めてきたところです。

主として学会の運営面を書きましたが、学会としての本来の活動を活発にし、また深めていく必要性も痛感しております。研究会活動としては2022年度以降、新型コロナウイルスの影響で休止していた写真プリント研究会や写真史研究会の開催を復活しました。これら研究会も今後は各研究分野の分科会として、より活発な活動を進めていくべきでしょうし、新たな研究会活動を検討し進めることも望まれます。

また近年、学会誌論文に関する問い合わせも受けています。多くの写真家が会員として参加し、創作研究を行っていることは本学会の特徴ですが、制作者の視点からのユニークな研究も多々あるはずで、それらを含む多くの研究成果が過去の学会誌に蓄積されているわけです。このような学会の研究成果をJ-Stageなどを通じて広く発信していくことなども学会活性化には必要な取り組みであると考えております。

会員の皆様には、これらについて一層のご理解をお願いするとともに、学会の活性化を目指すため、さらなるご協力を頂ければ幸いです。末筆ながら、会員の皆様にはご健康に留意してお過ごし頂くとともに、今後とも本学会をよろしくお引き立てのほどお願い申し上げる次第です。

日本写真芸術学会会長 高橋 則英

## 2. 年次大会 報告

本年令和6年度の年次大会は、前号(No.84)の学会ニュースでご案内いたしましたように昨年に継続して、総会は文書総会にて開催、研究発表会・学会賞授賞式は対面形式(オンライン併用)にて、去る7月13日(土)、東京工芸大学中野キャンパス5号館(芸術情報館)1階メインホールをお借りして開催いたしました。

### 総会報告

令和6年度第33回通常総会は文書総会(6月14日送付)として、会則第15条【総会は正会員の1/3以上の出席(委任状を含む)を以て成立し、議事は出席者の過半数の賛成により決定する。但し、賛否同数の場合は、議長がこれを決める】に則り書面表決として行われました。ハガキによる投票の結果、正会員数361名のうち135通の返信があり総会は成立し、以下議案の全てにおいて承認されました。

### 日本写真芸術学会 第33回通常総会(議案送付による文書総会・書面表決)

#### ◎報告事項

1. 理事・評議員・監事改選選挙結果報告

#### ◎議事

- 第1号議案 会務・会勢報告
- 第2号議案 令和5年度事業報告
- 第3号議案 令和5年度会計報告・会計監査報告
- 第4号議案 令和6年度事業計画
- 第5号議案 令和6年度予算案
- 第6号議案 会長・副会長選出の件

## 研究発表会



### 研究発表 1 (作品口述) .....

川上 洸 (大阪人間科学大学 人間科学部 社会創造学科)

「存在の確認 ～スナップ写真家のセルフポートレート～」

— スナップによるセルフポートレートの作品についての研究であり、独自の視点でスナップとセルフポートレートをまずは定義づけた。そしてスナップ写真家によるセルフポートレートは「世界の中で、自分が確かに存在していることの確認の行為」として自分を世界の一部として写し込んでいると考察し、それを作品で表現していた。 (発表座長：西垣仁美)



### 研究発表 2 (作品口述) .....

大和田 良 (東京工芸大学芸術学部)

「FLORA / ECHO - ルーメンプリントを用いた写真表現の実践 -」

— 花を被写体とした作品であり、植物の多様性と色彩の表現に関する新たなアプローチを目指し、制作されている。撮影はフラットで且つ適度なコントラストが得られるライティング、背景はシンプルが基本であり、デジタルカメラを中心に、大判白黒フィルム、湿板コロジオン法、フォトグラムも使用。プリントはルーメンプリントであった。(発表座長：西垣仁美)



### 研究発表 3 (調査口述) .....

石黒 敬章

「新発見の首里城正殿の古写真から大龍柱の向きを考える」

— 2019年に消失した首里城の再建にあたり、沖縄県内で正殿の龍柱が正面向きか内地の神社の狛犬のように相対向きかについての激しい議論が生じている。明治期の首里城の写真を発見・提供して1992年の復元の際に貢献した石黒氏は、その他の時期の写真にある龍柱の姿と資料を検討して正面向きの説を支持した。(発表座長：小原真史)



### 研究発表 4 (調査口述) .....

鳥海 早喜 (日本大学芸術学部)

「日本大学芸術学部所蔵旧岩波コレクション形成における永見徳太郎と山端祥玉から見る写真資料アーカイブに関する調査報告」

— 現在、日本大学芸術学部が所蔵する幕末～大正初期の写真及び文献資料を中心とした史料群である旧岩波コレクションについて、詳細な資料調査による資料リストの作成、及び今まで経緯が明らかでなかったコレクションの来歴の一部についての調査結果が報告されました。また併せて最初の蒐集者である永見徳太郎や、永見の蒐集の一部を継承した山端祥玉が旧岩波コレクションの形成に果たした役割などについての考察が発表されました。(発表座長：佐藤英裕)



### 研究発表 5 (調査口述) .....

西川 瞭 (滋賀県立大学大学院人間文化科学研究科)

「『VOGUE』におけるウィリアム・クラインのファッション表象」

— 従来主に写真集『ニューヨーク』に焦点が当てられてきたウィリアム・クラインの、アメリカ版『VOGUE』における仕事の概観を通し、作風の変遷、及びモデルという「人工物」をストリートという「現実」の空間に置く画面作りによって、ファッション誌が提示する理想像を露悪的に「偽り、見せかけ」とであると見せる演出等を通して、クラインがファッションをどのように表象しようとしたのか考察した研究が発表されました。(発表座長：佐藤英裕)



#### 研究発表 6 (調査口述)

○圓井 義典 (東京工芸大学芸術学部) 上田 耕一郎 (東京工芸大学芸術学部) カワノミオ (東京工芸大学芸術学部)

「各国の主な美術館におけるダイバーシティにかかわる実態調査とデータベース化 (第 1 期)」  
— 日本においてもダイバーシティという価値観は一般化しつつあります。しかし、その価値観を具体的に社会に実装するためには、過去から現在における各国の状況を明らかにしておく必要があるでしょう。本研究は、その一助とすべく各国の主要な美術館における収蔵作家の属性を調査、数値化し、その傾向を明らかにすることを試みています。今回の発表ではその途中経過として、これまでに明らかになったことが報告されました。(発表座長：吉田 成)



#### 研究発表 7 (調査口述)

○白岩 洋子 (白岩修復工房) 山口 孝子 (東京都写真美術館) 塚田 全彦 (東京藝術大学)

「前衛の時代：着彩写真に関する調査」

— カラー写真以前、プリントに色をつけることは広く行われてきました。日本では幕末・明治期の鶏卵紙に手彩色されたものが広く知られていますが、20 世紀半ばに新たな写真の表現方法として再び着彩写真が現れます。今回は東京都写真美術館に多数の作品が所蔵されている植木昇の着彩写真を例に、その制作背景、技法や色材についての調査結果が報告されました。(発表座長：吉田 成)



#### 研究発表 8 (論文口述)

高橋 則英 (日本大学大学院)

「初期写真の記録性— 19 世紀のコロディオン湿板写真の情報量を中心に」

— 歴史的価値をもつ初期写真原板から同時代の技法による印画制作を行うことを目的にした研究の中から、特にコロディオン湿板写真の特性について発表されました。これまでの幅広い調査による実例から始まり、後半では解像力チャート撮影実験の結果として、コロディオン湿板写真の圧倒的な記録能力の高さが報告されました。(発表座長：鳥海早喜)



#### 研究発表 9 (論文口述)

谷 昭佳 (東京大学史料編纂所)

「日本におけるオートクローム写真の地方展開について— 鳥取での事歴を中心にして—」

— オートクロームについて鳥取の写真機材店の事歴を中心に、大正期の普及活動と現存資料について発表されました。写真雑誌『写真界』の検証により、オートクロームは一時人々を魅了したものの戦争や異なる技法の広まりにより衰退したと考察されました。今後の展開として、原板を用いたモノとしての検証可能性も語られました。(発表座長：鳥海早喜)



#### 研究発表 10 (論文口述)

白山 真理 (フリーランス)

「名取洋之助関連ネガの継承にみる写真観の変遷」

— 白山氏は日本工房と名取洋之助関連のネガが戦後、どのような軌跡をたどって現在の土門拳記念館や日本カメラ財団、日本写真保存センターに渡ったのかを詳細に辿った。また、これらの写真の扱われ方から、〈報道写真〉の特徴とそれぞれの時代における写真観の変化を探った。(発表座長：小原真史)



学会賞 井津建郎氏

## 学会賞

今年度の第24回日本写真芸術学会賞は、昨年の年次大会で基調講演をお願いした写真家の井津建郎氏が芸術賞に選考され、会長から賞状とトロフィーが授与されました。

芸術賞・井津建郎氏 受賞理由：

写真展「祈りのかたち」(Roonee247 令和5年11月21日-12月10日)および写真展「BLUE」(PGI 令和5年11月22日-令和6年1月13日)に対して。「祈りのかたち」はボタンに取材した作品で、その地に生きる人々の姿と自然を美しく捉え、幸せとは何かを考えさせられる内容である。暗部から明部までの階調が見事なプラチナプリントとして仕上げられている。「BLUE」は美しいフォルムを捉えた女性ヌードと、静物をモチーフとした作品で構成されている。プラチナプリントとサイアノタイプを何層にも重ねて作り上げた黒と青の美しく深みのあるプリントとしている。物質としての写真の価値、クラフトとしての作品の価値をも感じる印象深い写真展となっている。これらの理由により高い芸術的意義を認められる本作品に対して芸術賞を授与する。



高橋会長から井津建郎氏へトロフィーの授与



会場風景



研究発表風景



開会の挨拶 高橋会長



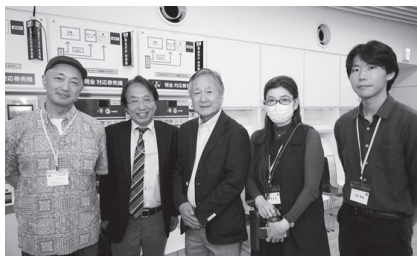
上田実行委員長



閉会の挨拶 吉田副会長



乾杯の挨拶 井津建郎氏



懇親会

### 第3回 写真史研究会報告

#### 「明治のメディア王 小川一真と写真製版」

日 時：令和6年1月27日（土） 14:00～17:00

会 場：印刷博物館 研修室および展示室（常設展示を含む）

内 容：レクチャー / 質疑応答 14:00～15:30 展示見学 / 追加質疑 15:30～17:00（参加費 500円）  
ゲストおよび演題：

川井昌太郎氏（印刷博物館・学芸員）「《明治のメディア王 小川一真と写真製版》展について」

岡塚 章子氏（江戸東京博物館都市歴史研究室長・学芸員）「小川一真の写真と複製作品」

参加者：23名（実行委員・会員外含）

この度、印刷博物館のご厚意により同館における企画展「明治のメディア王 小川一真と写真製版」に合わせ、第3回写真史研究会を開催しました。

小川一真（1860-1929）は、明治中期から大正期にかけてのゼラチン乾板時代に、写真撮影だけでなく、国産乾板の製造、印刷製版と出版、写真団体結成と写真文化振興など様々な分野で活躍し、ただ一人皇室技芸員を拝命した写真師でした。展覧会では、小川一真の数多くの業績の中から、とくに写真製版の分野に注目し、小川一真が我が国に導入したコロタイプ印刷と網目版印刷という二つの写真製版技術で製作された印刷物を中心に約100点の資料が展示されています。

当日は最初に高橋会長が開会挨拶と学会および写真史研究会についての説明を行った後、今回の展覧会を担当された印刷博物館学芸員・川井昌太郎氏から展覧会開催の経緯と見どころについてレクチャーをして頂きました。

川井氏は、江戸東京博物館が大規模改修工事に入るため、岡塚氏より日本の近代化を支えた技術である「写真と印刷」をテーマにした企画案が提示されたことが今回の展覧会の発端であったこと。その後打ち合わせを重ね、テーマが「小川一真と写真製版」に決まったこと。多くの事前調査により、撮影だけでなく印刷・出版を膨大に行った印刷人としての小川一真を紹介するため、コロタイプと写真凸版という写真製版を軸にした展示を企画したということ述べられました。

続いてもう一人のゲストである江戸東京博物館の岡塚章子氏のレクチャーに移りました。岡塚氏は、著書『帝国の写真師 小川一真』により令和5年度の日本写真芸術学会学術賞を受賞され、また今回の展覧会の構成もされています。

岡塚氏は、1990年に東京都写真美術館が第一次開館した翌年、小川一真の多数の資料が江戸東京博物館と写真美術館に入ることになり、学芸員として小川との関りが始まったこと。その後2000年には小川の資料を中心として「写された国宝」展を写真美術館で企画し、庭園美術館、江戸東京博物館へ異動してからも小川の資料と関わる展示を行ってきたことを話されました。また近年明らかになった横山松三郎と小川との関係を紹介するとともに、小川が撮影し当時焼き付けられた写真で現存するもの、また薨去した明治天皇の霊前に供えるため皇室技芸員として制作した多数の印刷物について、展示されている小川考案の写真を用いた木版色刷を図解した印刷物なども含め紹介をされました。

そして会場からの質疑応答を行った後、参加者は展示室で小川一真の作品や関連資料について熱心に閲覧を行いました。

今回の研究会は、乾板時代の写真界の重鎮でありながら、没後忘れ去られてしまったともいえる小川一真の写真界で果たした役割、主要な業績である印刷製版の技術と数多くの貴重な出版物について、また近代日本の視覚メディアの発展と視覚文化の形成に与えた多大な影響について、理解を深める貴重で有意義な機会となりました。（報告：高橋則英）



開会挨拶



岡塚章子氏



川井昌太郎氏

## 4. 写真プリント 研究会 報告

### 第5回 写真プリント研究会

「デジタルモノクロ銀塩バライタプリント（通称ラムダバライタ）について」

日 時：令和6年2月3日（土）14:00～15:30

会 場：東京工芸大学中野キャンパス1号館2階1204教室

内 容：講演／質疑応答

演 題：「デジタルモノクロ銀塩バライタプリント（通称ラムダバライタ）について」

講 師：広川 泰士（写真家）

武田 浩（DSKマーケットエクспанションサービス株式会社）

澁井 誠（株式会社写真弘社）

澤崎 暁生（株式会社写真弘社）

参加者：32名（実行委員・会員外含む）

日本写真芸術学会では、写真表現において、最も基本的かつ写真作品の根源ともいえるべき“プリント”を大切にしていきたいと考えています。現在、写真は身近なコミュニケーションのツールであり、アートの重要な表現手段となっていますが、デジタル技術の急速な発達に伴い、発表の場や方法も多様化し、写真表現そのものも変化してきました。このような時代の流れの中で、写真表現とプリントの今後について会員の皆様と共に考えるため、平成28年に「写真プリントセミナー」を開催して好評を博しました。今回の研究会では、「STILL CRAZY nuclear power plants as seen in Japanese landscape」「TIMESCAPES- 無限旋律 -」等の作品で良く知られ、日本を代表する写真家の一人である広川泰士氏を含め、4人の講師をお招きして研究会を開催致しました。

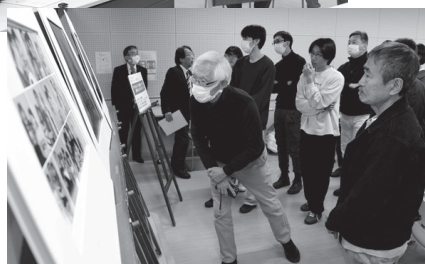
当日は、最初に吉田副会長が開会挨拶として写真プリント研究会の趣旨説明を行った後、今回の講演のコーディネーターでもある澁井誠氏より、講演全体の流れ、及びデジタルモノクロ銀塩バライタ（通称ラムダバライタ）に関する概要のご説明がありました。続いて武田浩氏より、機器メーカーであるダーストの歴史、ラムダが日本に導入された経緯、機器の構造、レーザープリンターのロジックに至るまでの詳細なご説明をして頂きました。次に、澁井氏よりラムダバライタに使用する印画紙（ILFORD HARMAN GDS FB 1K）についてご説明を頂き（テクニカルデータは、会場にて配布）、さらに大判印画紙現像や乾燥等の製造工程を写した動画を見せて頂きました。次に広川泰士氏より、撮影やフィルム現像のエピソード、プリンターへの指示の方法等、興味深いお話を聞かせて頂きました。3人の講演者のお話を伺った後、ラムダで出力したサンプルプリント（カラーペーパー、RCペーパー、バライタ印画紙等）、そして広川氏の素晴らしい作品を間近で拝見する機会を頂き、その上で活発な質疑応答を実施しました。質疑応答では、澤崎氏から、プリントの際に工夫した点等が語られ、広川氏からは引き伸ばし機でプリントした場合とラムダでプリントした場合の表現の違い等を語って頂く等、非常に深いディスカッションができました。

ラムダバライタは、デジタル技術とアナログ技術のハイブリッド方式であり、大変興味深いと感じられました。また今回の研究会は、写真家、プリンター、プリント機器の供給者が一堂に会したことが珍しく、皆様が制作や研究をされる上で有意義な機会となりました。

（報告：吉田 成）



会場風景



開会の挨拶 吉田副会長



講師の広川泰士氏

## 5. 理事会 報告

### 令和6年度第1回理事会 R6.4.23

(オンライン会議)

#### 報告連絡事項

1. 令和5年度第9回理事会議事録確認
2. 令和6年3月(令和5年度)収支報告
3. アート・ドキュメンテーション学会シンポジウムについて

#### 審議事項

1. 会員入退会手続き
2. 令和6年度役員合同会議開催について
3. 令和6年度年次大会について(総会議案・学会賞)

### 令和6年度第2回理事会 R6.5.28

(オンライン会議)

#### 報告連絡事項

1. 第1回理事会議事録確認
2. 4月・5月収支報告
3. その他—アート・ドキュメンテーション学会シンポジウム案内

#### 審議事項

1. 会員入退会手続き
2. 第33回通常総会議案審議
3. 年次大会研究発表会申込について
4. 会長副会長選出について
5. その他—会費未納者への請求方法・学会ニュース発行・学会誌<論文編>投稿再募集

### 令和6年度第3回理事会 R6.7.3

(オンライン会議)

#### 報告連絡事項

1. 第2回理事会議事録確認
2. 第33回通常総会返信数
3. 5月・6月収支報告
4. その他—アート・ドキュメンテーション学会シンポジウム開催報告

#### 審議事項

1. 会員入退会手続き
2. 年次大会研究発表会プログラムと座長について
3. その他—学会誌の判型・論文のwebでの公開・編集委員長辞意表明

### 令和6年度第4回理事会 R6.7.29

(オンライン会議)

#### 報告連絡事項

1. 第3回理事会議事録確認
2. 第33回通常総会(文書総会)審議結果報告
3. 年次大会研究発表会実施報告
4. 7月収支報告

#### 審議事項

1. 会員入退会手続き
2. 学会ニュースNo.85構成案
3. 学会誌<創作編>アンケート結果について
4. 令和6年度後半期の研究会等活動について
5. その他—研究発表会への非会員参加者への入会勧誘・ホームページ役員名簿確認

## 6. 入会・ 退会者 一覧

### 令和6年7月29日・令和6年度第4回理事会承認分まで(50音順・敬称略)

[入会者・正会員]

薄井一議、亀岡倫太郎、清水謙一、堀智美、Cecile LALY

[学生会員から正会員へ移行]

安藤千穂子、石崎りり子、若子 jet

[入会者・学生会員]

安保遼太郎、遠藤祐輔、大野晃士朗、小澤知夏、大谷優実、大屋徳和、胡錦昊、鈴木茂行、李启睿

[正会員から学生会員へ移行]

吉成光太

[退会者]

浅井讓、影山あやの、小林昂、齋藤さだむ、田寄裕季子、谷口勲夫、轟近夫、中田昭、三穂雪舟(逝去)



## 8. 会員の 皆様に お願い

### 会員の皆さまにお願い

現在、日本写真芸術学会では、一層の学会活動の活性化と会勢拡大を図っております。そこで、改めまして会員の皆さまに次のようなお願いをしたいと思います。

- ① 学会誌（論文編・創作編）に積極的にご投稿下さい。
- ② 本学会主催の年次大会・研究会・セミナー等に積極的にご出席下さい。  
（研究会等の中にはアーカイブ配信しているものもございますので、ご視聴下さい）
- ③ 展覧会開催や関係図書の出版に際して、本学会の会員であることをプロフィール等にお示し下さい。
- ④ 展覧会開催や関係図書の出版に先立って、学会事務局に情報をお寄せ下さい。  
（学会ホームページ等を通じて、会員の皆さまの活動を広報します。）
- ⑤ 本学会の理念や趣旨に賛同される方をご存知でしたら、ご紹介ください。

#### 日本写真芸術学会 事務局

〒174-0051 東京都板橋区小豆沢 2-9-19  
TEL : 03-6279-8290 FAX : 03-6279-8291 mail : jsahp.info@gmail.com

# 日本写真芸術学会誌 第34巻・第1号

## 掲載原稿（論文・記事）投稿募集のご案内

（投稿料、掲載料とも無料）

学会誌は学会の重要な研究発表の場です。会員の皆様には益々活発な研究成果の発表・投稿をして頂きたいとお待ちしております

近年、投稿も様々な視点からのものが増えて参りました。継続して審査も一層の向上を図り、学会誌の充実に資して行きたいと考えております。

学会誌〈論文編〉につきましては、一昨年度より投稿料・掲載料とも無料となっています（通常通り査読は行います）。会員の皆様の活発な投稿をお待ち致しております。

詳細につきましては学会誌巻末または学会ホームページ内の「投稿規定」をご覧ください。

### —— 記 ——

**投 稿 締 切 日：**令和7年2月末日（投稿予定の方は令和7年1月中に事務局までお知らせ下さい）

\* 学会 HP の論文投稿申込フォームからお申込み頂くか、又は所定の申込書を添付して、投稿論文を期日までに学会事務連絡先までお送り下さい。

\* 原則として投稿論文はメール添付、CD 送付等によるデータ入稿をお願い致します。  
テキストデータの他、ページレイアウトのわかる PDF データ（英文タイトル、アブストラクトを含む）および論文に必要な図、表、写真原稿等のデータも別途お送り下さい。

\* 令和7年3月中に査読審査の上、ご連絡の予定です。

**発 行 予 定 日：**令和7年6月中旬

投稿論文等の数が極端に少なかった場合、またその内容や査読審査の結果によりやむを得ず発行を休止することもありますので、ご了承下さい。

キリトリせん

## 論 文 投 稿 申 込 書

年 月 日

日本写真芸術学会誌 <input style="width: 100px; height: 20px;" type="text"/> 号へ論文の投稿を申し込みます。			
氏名		会員番号	
連絡先	〒	電話	
		メール	
題名		原稿	原稿用紙 約 _____ 字
		形態	
論文概要			
事務局欄	年 月 日 受付		整理番号

コピーをとってご利用下さい。